

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：22401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24890185

研究課題名(和文) 心的外傷体験をもつ女性のレジリエンスとは 女性による女性のためのグループの実践

研究課題名(英文) Resilience of women with psychologically traumatic experiences -A group practice by the women for the women

研究代表者

市川 佳子(松本佳子)(Ichikawa, Keiko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：30277892

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：精神科病棟に入院中の女性患者を対象とした「娘グループ」の元コンダクターであった研究者が、娘グループの後継グループである「レディースグループ」で研究者として参加観察を行った。グループは、「娘グループ」時代と主要参加メンバーは変わらないものの、コンダクターの交代によって、その名称の変化に象徴されるような語りの内容の変化を見せた。新しいグループでは老いの受容、生々しい性的外傷体験、そして死をめぐる体験が語られる中で、それぞれの女性たちのレジリエンスが示された。レディースグループの実践から、看護師自身の家族の看取りといった個の体験と、専門職としてのケアをつなぐためのサポートが必要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The researcher who had served as the conductor of a "Daughters Group" formed by female inpatients of a psychiatric ward carried out a participant observation study, this time as a researcher, in a "Ladies Group" that succeeded the Daughters Group. The Ladies Group had the same core participants who continued from the Daughters Group. With the replacement of the conductor, however, the group showed change in narratives as symbolized in the change of the name of the group. In the new group, participants talked about acceptance of aging, raw sexually traumatic experience, and experience of loved ones' death, during which each participant demonstrated her resilience. The practice of the Ladies Group suggested that a support program for nurses is necessary that would enable them to capitalize on their individual experiences, such as attending a family member on his/her deathbed, in their professional care giving at the workplace.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：心的外傷 女性 集団精神療法 レジリエンス

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本では、精神科においても入院治療の急性期化などに伴い、入院患者の疾病構造が変化しており、多くの病棟で長期入院の中老年層と短期だが入退院を繰り返す若い患者層との二極化現象がみられている(立森・竹島・須藤他,2003;竹島, 2004;山角,2003)。このうち人数は少ないものの看護師が対応に苦慮しているのが、リストカットやパニック発作などさまざまな激しい行動上の問題を起こす、主に女性の若い患者たちである(Walsh & Rosen, 1988/2005)。背景に心的外傷体験をもつ者も多く、退院するにしても家族関係に問題を抱えていることが多い。そのため入院が長期化する可能性があり、ケアにも新たな方策が必要とされている。こうした傾向をもつ患者についての先行研究では、チームでの関わりやお互いの感情を自由に話すことのできる環境の重要性が示唆されており(森田・春原・古市他,2009)、患者同士のグループの有効性も示されている(相川,2007;小久保,2003;原田・影山,2009)が、こうしたセルフヘルプ的なグループは、医療施設外の地域か依存症専門病棟などで行われていることが多く、精神科病棟で看護師が実践するグループについては研究されていないのが現状である。

そこで筆者は、非常勤看護師として精神科病棟でフィールドワークを行う中で、生きる上でさまざまな困難を抱えている女性たちのための「娘グループ」と名付けたグループを同僚看護師の協力を得て立ち上げた。グループで女性患者たちが共通の苦しみや痛みを分かち合うことができれば、自己理解や他者理解も深まり、彼女たちの生きにくさも軽減するのではないだろうかと思ったのである。そして筆者自身も研究者ではあるが同時に1人の娘としてグループに参加し、患者たちと相互交流することができれば、深刻な葛藤を抱える娘たちの生きにくさについて新たな理解が得られるのではないかと考え、次のようにして「娘グループ」を開始した。

(2) 入院中の女性患者に、「娘による娘のための娘グループ始めます。娘さん、お集まり下さい」と呼びかけた。「娘グループ」は病棟プログラムの1つであると同時に、筆者がコンダクターを務めるアクションリサーチとしての研究の場でもあり、毎週金曜午前40分間、病棟内の診察室で、特にテーマは定めず自由に会話をしながら温かい紅茶を飲む茶話会形式で実施した。「娘グループ」は1年3カ月にわたり全63回実施された。あらゆる年代の女性達が集まり、参加人数は1回あたり平均8.1人であった。「娘グループ」の経過、及び考察は以下の通りである。

参加者たちの中には、母であり妻である者もいたが、彼女たちは何よりもまず「娘たち」であった。彼女らはいずれも同性である母親との関係の中で、見捨てられたり甘えたいのに甘えられない葛藤を体験していた。また、

成人してからも女性との関係の中で傷つけられ、根深い不信感を抱えていた。何よりも、自分を認めてもらえない、受け止めてもらえないという悲しみと怒りがそこにはあった。

そうした関係にまつわるさまざまな感情がグループの中に投げ込まれ、参加者たちは、これまで誰にも語られないまま抱えてきた自己の思いを、それぞれのやり方で表現するようになった。グループでは、メンバーの語りが錯綜し、怒りや悲しみや喜びといった感情が渦巻いた。それはさながらドラマのようであり、娘グループは即興劇として捉えることができた。メンバーはグループという非日常の舞台上、言葉だけでなく、歌や行動で自己表現し、それぞれの役割を演じるようになったが、それはこれまでの体験と結びついてきた。またグループでは、グループの終結と筆者の退職という耐えがたい「別れ」という喪失を共に体験する中で、互いに共鳴し合う関係が作られ、認めがたい感情を自身の言葉で語るできるようになった。また、傷ついた女性達のグループでのコンダクターという体験は、メンバーからのアンビバレンスに満ちた投影を受け、時に耐え難い痛みを伴った。コンダクターの仮面が剥がれ、個としての生の感情があらわになった時、グループの中に、患者と看護師という垣根を越えた確かなつながりの感覚が生まれた。グループという舞台では、患者も看護師も共に自己を自由に表現することが可能であり、それが普遍性に基づく確かなつながりの感覚を生み出したのである。

(3) 上記の研究成果から、新たに重要な課題が浮かびあがった。それは、参加メンバーの「心的外傷」、特に性的外傷の深刻さであった。グループの中には、深刻な性的外傷を負ったメンバーが複数存在していたのである。参加メンバーの秘められた深刻な性的外傷の在りようが、女性同士の互いのつながりを、より複雑な葛藤を孕む関係にしていた。しかし娘グループの終結が近づく頃には、彼女らそれぞれの「レジリエンス(回復力)」が発揮されるようになり、メンバーたちは互いに互いの治療的存在となりえていった。筆者の退職に伴い、「娘グループ」は2010年7月に終了したが、病棟では参加メンバーの強い希望で、病棟プログラムとして、女性のためのグループが続けられている。筆者に代わり、別の看護師がコンダクターをつとめ、グループの名称も「レディースグループ」に変わったが、週に1回、グループが継続して行われている状況である。

そこで本研究では「娘グループ」での成果を基礎に、「レディースグループ」として現在も継続して行われているグループでの語りを中心にデータを加え、新たな視点-「心的外傷」「レジリエンス」-を用い、より詳細な分析に着手する。グループでの語りから心的外傷体験をもつ女性の回復力について明らかにすることは、精神科看護のみなら

ず他の看護領域における心的外傷体験をもつ女性の看護についての実践的示唆を得ることになると考えるからである。

## 2. 研究の目的

精神科病棟において傷ついた女性どうしが集った「娘グループ」と、現在も引き続き行われている「レディースグループ」での語りの中で、メンバーの「心的外傷」-特に深刻な性的外傷の在りようが、女性同士の互いのつながりにどのように影響していたのかを明らかにする。また、グループプロセスの中で、メンバーの「レジリエンス」がどのように発揮されていたのかに着目し、レジリエンスを高めるファクターについて明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1)「レディースグループ」のデータ収集を行う。具体的には以下の通りである。

「レディースグループ」は毎週金曜日の午前中 40 分間、病棟の一角にある診察室にて実施している。毎回、ソファに座り、飲み物を飲みながら、特にテーマは定めず自由に話をする茶話会形式である。病棟の一角にある 8 畳ほどの広さの診察室で行われている。

毎回グループ終了後、研究協力者であるレディースグループのコンダクターと共に、30 分程度のレビューを行う。レビューとは、グループワークの終了後に行われる振り返りのセッションのことをいう。レビューでは、グループで話題になったことのほか、患者同士の相互交流、スタッフと患者とのやりとりの様子、気になった患者のこと、グループの雰囲気などを自分たちの感想を含めて振り返る。また、そのとき病棟で起きているさまざまな出来事や動きと照らし合わせながら、記憶の範囲内でできるだけ克明にメモを取り、その際言語的な表現に留まらずしぐさや態度といった非言語的な表現にも注目する。グループ記録はファイルにしてナースステーションに置き、スタッフが閲覧できるようにする。そして、互いの患者理解を深めるために、口頭でも適宜研究経過を病棟スタッフに報告しフィードバックを受ける。

(2) 筆者が研究協力者と綿密に連携をとり、「レディースグループ」のプロセスに継続的に関わり、グループの中で何が起こり、どう展開していったのか、そのプロセスについての分析を毎週グループが行われるごとに繰り返し、グループのダイナミクスを多面的な角度から再構成する。さらに、「心的外傷」「回復力(レジリエンス)」という視点から、グループで語られたことの解釈や病棟で起きている事象との関連などについて分析を試みる。そして、次の回の「レディースグループ」のかかわりに生かして妥当性を確かめるようにする。本研究は、このような一連の円環的プロセスを繰り返しながら進めていく。

## 4. 研究成果

研究の主な成果を述べるために、まず、「レディースグループ」の経過を再構成したものを、5 期に分けて述べていく。

### (1)「娘」から「レディース」への変化

「レディースグループ」のメンバーは流動的に入れ替わったが、主要な参加メンバーは「娘グループ」時代と変わらず、毎回の平均参加者数もほぼ同様の 8 名前後であった。「娘グループ」時代は、グループ開始前にコンダクターである筆者が「娘さん、お集り下さい」と放送でアナウンスしていたが、「レディースグループ」では、コンダクターに促され主にメンバーがグループ開始のアナウンスをするようになった。高齢のメンバーは正確に発音できずに、「デニッシュグループ」「グループフルーツ」と言ったり、「人魚姫の皆さま、レディースグループですよ」と呼びかけたり、患者たちは自由に呼びかけを行った。また、「娘グループ」時代は温かい紅茶だった飲み物が、「レディースグループ」ではティーカップにココアパウダーと粉ミルクを入れ、そこに紅茶を注ぐなど、メンバーの希望に応じてアレンジを加えるオリジナルドリンクへと変化が見られた。

### (2) グループの名前をめぐる語りと老いへの自覚

「レディースグループ」の初回は、コンダクターから「グループの名前を決めましょうか」と提案があり、「娘グループ」の最終回に参加していた B (50 代後半) から「レディースがいいと思います」と発言があった。それに対して C (60 代前半) が「レディース? みんなおばさんだよ。私は小町がいいな」と言い、すると B は「レディースは淑女という意味があるの。女性は成人してから死ぬまでレディースなの」と発言した。誰かから「年とってもレディース!」と声上がり、この声に「娘グループ」の時からコンダクターに寄り添うように寡黙に参加していた D (70 代) は、顔を赤くして笑った。再び「小町がいい!」と口火を切った C に対し、B は「小町は美人という意味なの。美人はいないよ!」と声を大きくして言い、結局グループの名称は「レディース」に決まった。

またグループ開始して 1 ヶ月半後の 7 回目、50 代のコンダクターの「生理が終わったら寂しいよ」の発言に、C から「ナプキンの後は紙パンツだね」と茶化すような発言があったり、窓際の植物が枯れてきているという話題がでて「枯れるのは、私みたい〜」と大きな声が上がったりするなど、躁的な中にも「老い」に直面するメンバーの心情が語られた。

### (3) 性にまつわる傷つきの語りと苦しみの共感

レディースグループを開始して 3 回目、レディースの名の提案者であり「娘グループ」からの参加者でもある B が、「昔、体験したことあるの。連れ込み旅館に連れ込まれてレイ

プされたの」と小さな声で、初めて性的外傷体験を語った。そして13回目にも、グループ名について小町を提案していたCがぼそっと、「父親に強姦されたことがある。40年前」と発言するなど、非常に生々しい外傷体験を語った。「娘グループ」時代にも、他のメンバーからこういった性的外傷体験についての話題が度々あがっていたが、BとCからは出たことはなく、「レディースグループ」になって初めてのことであった。

病棟には、「男組」という男性のためのグループもあったが、ある時、男性患者2人が「心は女なのでいいですか？」と突然「レディースグループ」に入ってきて飲み物を飲んでいくことがあった。このような時期にBは、独特のばか丁寧とも感じられる口調で、「検診は恥ずかしい格好なんでしょう？」「昔はコーラの瓶は普通の瓶だったけど、売れないから女性の体型にしたそうですよ」と発言し、さらに女性器をステッチという単語で表現するなど不快な性的ニュアンスを含むグロテスクな発言を繰り返すことが目立ち、グループの空気が凍り付いたようになって、メンバーやコンダクターを戸惑わせた。しかし、禁煙の苦しみを訴えるCがその苦しみや怒りを爆発させると、Bが「苦しい時は、変なこと、考えちゃうのよね」とCの気持ちに寄り添うような発言をして、グループを温かな雰囲気包むきかけとなることもあった。

(4)Aの変容：ゴーヤに自分を投影し素直に気持ちを伝える

「娘グループ」から「レディースグループ」に引き続き主要メンバーとして参加していた中に、A(40代)という患者がいた。「娘グループ」時代、Aはコンダクターであった筆者に対して同世代の女性同士ということもあってか、強いライバル心を見せ、甘えたいのに甘えられない葛藤から激しい攻撃にさらされた筆者が思わず涙することもあった。「レディースグループ」でのAは、グループの行われる診察室から窓越しに見えるゴーヤに自分自身を重ねる発言が何度かみられた。コンダクターが「新しい苗にかわって、ゴーヤも元気に育ってるね」と水をかけると、Aは「ゴーヤ、ぼうや、勉強しなさいって育てたんだ」と手で抱っこするしぐさをしながら応えた。その後のグループでは次のような会話になった。(Coはコンダクターを示す)A「『ゴーヤも勉強しなさい!!』じゃなくて、植物なんだから優しく声をかけながら水やりするといいかもね」

Co「自分がゴーヤなら、なんて声かけられる？」

A「よく頑張っているねって言われたい」

またAは宿泊型自立訓練施設への入所をめざし、短期試験外泊を繰り返していたが、その直前のグループでは、「ゴーヤの葉っぱが枯れてるから、もうこれ以上育たないから湿ってるから根っこも腐ってるよ」と語った。Aはゴーヤに自分を投影しながら、しだいに

素直に自分の気持ちを語るようになっていた。そして、宿泊施設の外泊を終えてくると、疲れきって元気ない表情でグループに参加した。コンダクターが「昨日は外泊おつかれさま」と労うと、「うん、すごく緊張したよ。すごく緊張しちゃうんだ」と感情を言葉にした。するとそんなAに、ふだんあまり喋らないDがたくさん声をかけ、Aの気持ちをほぐそうとしているようだった。そして、久しぶりに参加して隣に座った筆者の手の甲に、Aが自分の手の平を重ね合わせて自然に甘えてきたことに、筆者はとでも驚かされた。

(5) 親しい人たちの死をめぐる語りと互いに思いやる気持ち

3年7ヶ月におよぶレディースグループの経過中、メンバーが2人亡くなった。これは「娘グループ」時代にはなかったことであった。そのうち1人は、亡くなる前日にグループに参加し、翌日の施設入所中の母親への面会を気にして、「明日の朝、何時にパンを食べればいいですか？悩んでしまう。パンがおにぎりどっちがいい？」と発言していたが、翌日、面会に行く電車内でパンを詰まらせて窒息死してしまったのである。レディースグループが始まって2年たった時期であった。直後のグループでは、この常連メンバーの死については語られず、芸能人や以前亡くなった患者の話題が立て続けに語られた。

もう1人は、レディースグループが始まって3年がたった頃、グループに初参加し、コンダクターに促されて「皆、昔はホールでソーセージとか焼き鳥とか、長いままこうやって食べたんだよ」「もう、食べられないんだ」と身振り手振りをつかって熱弁した翌日の朝、突然死してしまった。この直後のグループでは、常連のE(40代半ば)が開口一番、「さんが亡くなりましたね。先週、初めて参加して亡くなりましたよね。あの席に座っていたんですよ」とその患者について話し出し、その死を悲しむEに、50代のコンダクターが「亡くなった人の話をしてもいいと思うよ。それが供養になるよ」と声をかけると沈黙があり、死を悼む雰囲気になった。

さらに、メンバーたちは、近親者の死について語りだした。父親に強姦されたことがあると告白したCの父親は最近病気で亡くなったが、Cは、「なかなか死ねないんですね。60になっても真っ黒だし、お父さんも死んじゃったし…」など度々、死を話題にした。また、好きな映画のDVDは『花嫁のパパ』だというEも、グループで離院や看護師の退職などの話題が続いたとき、「父が亡くなったのを思い出しました。よくお父さんとコンビニでおでんを買った。実家に帰りたいけど帰れない…」とぼつりと話した。彼女は、最近、父親を病気で亡くしていたのだった。

そんな中、コンダクターの1人がご主人の看取りのため1ヶ月半にわたり休職することになった。Eは、「さん(コンダクター) 辞

めないよね。来週、来るかな？」と不安を口にし、Cはタバコを禁煙していることを褒められても、「現実感がない」と発言するなど、コンダクターの不在がメンバーに大きく影響していた。この時、研究者として「レディースグループ」に参加していたものの、自分のあいまいな立場に不安を感じていた筆者自身も、コンダクターが1ヶ月半いなくなることに「さん、来なくなっちゃったらどうしよう」と感じていたため、Eの言葉に自分の気持ちを言い当てられたように思った。「娘グループ」時代は筆者に激しく反発していたAが、心細さを窓辺のゴーヤに映し出し、筆者の手に手のひらを重ねてきたのは、その時だった。筆者は自分が心細く感じていることにそこで気づかされたのだった。

やがてコンダクターがグループに復帰した回では、休みの理由は知らされていなかったはずにもかかわらず、Eはずっと怖い顔をして、「さんの旦那さんが亡くなったから、笑っちゃいけないと思って…」と言った。また、普段あまり自分からは語らないDも、「さんが今、辛い状況だから悪いと思って（常連メンバー）は今日、来なかったのかな」と口にするなど、メンバーたちはそれぞれにコンダクターに対する細やかな気遣いを見せたのだった。さらにEは、「父が亡くなったの…。一周忌のお線香あげられなくて、今でも泣いちゃう」と切なく語った。

以上のグループの経過をふまえ、本研究の主な成果と今後の展望について述べる。

#### (6)【研究成果】グループの変化の要因とレジリエンスについて

「レディースグループ」では、メンバーは「娘グループ」の時とは違った顔と語りを見せた。とくに、娘グループでは筆者に激しい敵愾心を見せ、他のメンバーの気持ちを顧慮することもなかったAが、レディースグループではゴーヤにかりて素直な心情を吐露していたのは驚きであった。

「レディースグループ」では、50代のコンダクターの「生理が終わったら寂しいよ」の言葉に触発されて、同年代のメンバーたちが閉経の話題や老いを巡る揺れる気持ちについてそれぞれに語り始めた。こうして、メンバーとコンダクターとの老いという体験をめぐり共鳴を通して、メンバーたちは自分たちのリアルな現実を受け入れ、「娘」から「レディース」へと変容していったのである。

また、レディースグループの名称を巡って、互いにこだわり主張していたBとCが、開始後間もなく、それまで秘め続けてきた自分が若い娘だった頃の傷を、グループが「娘」から「レディース」へと変わってから語り始めた。それは一体なぜだったのだろうか。

近親姦の犠牲となった女性のグループを実践した Ganzarain & Buchele (1988/2000)は、「集団に属している belonging という感覚には重要な治療的価値があり、その感覚は患者

たちの自己イメージの改善につながる」(pp.79-80)「グループの中で仲間になるということ partnering は自己イメージを改善するもう一つの道である」(p.80)という。確かにBがCを気遣う場面は印象的で、互いの傷に無意識に反応し、つながりをもとうとしているように見えた。そこには、コンダクターであった著者の退職と「娘グループ」の終結という喪失体験を経て、「レディースグループ」として再生したメンバーの強さと成長-レジリエンス-が見て取れるのだった。

#### (7)【研究成果】グループで語られる死とレジリエンス

「レディースグループ」では、仲間である入院患者の突然の死について、最初は黙して語らなかつたメンバーが、やがてそれを語りだし、その死を言葉にして悼むようになった。精神科病院では、概して入院患者の死は他の患者には秘密にされ、話題にすることは避けられがちである。しかし、近年病棟内では、長年の入院生活で高齢化した患者が、次第に寝たきりとなったり、身体疾患のため専門病院に転院となったり、時にはその転院先で亡くなったことが伝わったりなど、身近な仲間の死に触れる機会が以前よりずっと増えてきている。しかも、精神科に入院している患者達には、ここで語られたような身近な人の死の衝撃が解決されないまま心の奥底に残されていることが多い。このグループで仲間の患者の死についての話題を恐れることなく口にするようになった患者たちは、やがて自らの身近な人の死についても語るようになった。そして、はからずもコンダクターの1人が伴侶を看取るために休職せざるを得なくなった時、メンバー達は深刻な見捨てられる不安を体験することになった。しかしそのコンダクターが再びグループの場に姿を見せた時、メンバーはそれぞれに細やかな気遣いを見せ、さらに自らの親の死を悼み悲しむことができたのだった。ここにも、メンバー達それぞれの究極の別れ-死-の際に際立つレジリエンスをみてとることができる。

#### (8)【今後の展望】グループでコンダクターが個人的な体験の共有を迫られること

筆者は「娘グループ」でのコンダクター体験を通して、コンダクターの個としての生の感情があらわになった時、患者とスタッフという垣根を越えたつながりの感覚がグループの中で生まれ、共鳴しあう関係がうまれたこと、また、痛みを伴う「別れ」でさえも、その体験を共有し共に乗り越えようとする中で、重要な治療的契機となりえることを示した(松本,2014)。今回は死別という究極の喪失の痛みをスタッフと患者がグループの中で共有したことで、患者達は喪の作業を進めることが出来た。これは彼女らのレジリエンスの一端を表し、レジリエンスを高めるファクターを示しているといえよう。

だがこれをコンダクターの立場から見れば、どうだったのだろうか。

今回、筆者にとって、コンダクターという役割を離れ、研究者としてではあるが1メンバーとしてグループにいるという体験は、重荷から開放された感覚と同時に、どう振る舞えばよいのか躊躇しとまどう体験でもあった。しかし、役割を離れて気づいたのは、コンダクターの孤独のありよう、であった。個人的に辛い出来事があってもコンダクターを続けなくてはならない。未だ心の整理が出来ておらず、人に語る準備が十分とはいえないときであっても、グループでは辛い個人的な体験を患者たちと共有することを迫られ、仕事とパーソナルな世界を切り離すことが出来なくなる。とくに語る準備ができていのかどうかは、その場になってみないと実際にはわからないということもある。

一般には、看護師自身の別離や喪失の体験はその後のケアに生かされるものと信じられている。しかし坂口(2010)は、老年期にある親を看取った看護師への聞き取り調査から、心の奥深くに残る辛い体験が必ずしもその後のケアに対してプラスの体験になるとは限らないと述べている。また、看護師も自らの個人的な傷つき体験は職場には持ち込まず、切り離すべきであると考えがちである。だが、Obholzer(2006/2014)は、専門家自身のパーソナルな部分とプロフェッショナルな部分のスプリッティングという防衛によって個人的経験という財産が治療の場から失われてしまうことを危惧し、専門家の個人的経験を活用することの必要性について言及している。確かに、レディースグループのような長期入院の高齢化したメンバーの多い精神科病棟では、グループはいまだ悼むことができないでいる喪失を抱えたメンバーと孤独なコンダクターが出会い、共感することを通して喪の作業をすることが可能となる場である。しかし、コンダクターにしてみれば、仕事とはいえ、心的外傷の再現となることもあるのではないかと。喪失体験は人間である以上、避けられないことである。コンダクターが個人的経験を活用し、グループを続けていくことができるためには、周囲の理解とサポートの力が問われることになる。

入院日数の短縮化が叫ばれる一方で、長期入院を余儀なくされ高齢化した患者の多い精神科病棟は、本格的な多死社会を迎えるこれからの日本社会の状況を先取りしているといえる。看護師も、自身の家族の看取りなど、個人として死に直面する機会が増えるであろう。さらに病棟内でも患者の死に遭遇することも増えてくることが予測される。そういった中、自らの身近な人を喪うというプライベートな体験と専門家としてのケアやグループでの役割を、どうつなげていくことができるのか、その困難な課題と向き合っていくためには、どのようなサポートが必要なのか、今後考えていくべき課題をレディースグ

ループの実践は示してみせたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

松本佳子、私にとってのグループ経験;「娘グループ」を立ち上げて、臨床看護、査読有、Vol.39、No.9、2013、pp.1240-1244

〔学会発表〕(計1件)

松本佳子、石井ゆかり、関根律子、精神科病棟における女性による女性のための「レディースグループ」、日本集団精神療法学会第31回大会、2014年3月22日、東京

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

市川(松本) 佳子(ICHIKAWA, Keiko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号: 30277892

(2)研究分担者 なし

( )

研究者番号:

(3)連携研究者 なし

( )

研究者番号: